

審査の結果の要旨

氏名 新藤浩伸

公会堂は現在の用語でいえば文化会館や公民館の前身にあたる多目的ホールであり、大正期から昭和前期にかけて各地に設置された。本研究は、本格的な歴史研究の対象とされてこなかった公会堂について、設置の経緯、事業内容、そして果たした機能という3つの課題の検討を通して、その文化的、社会教育的機能を明らかにすることを目的にしている。

序章で問題意識を述べたあと、第1章では教育学、アートマネジメント、建築学、公共施設研究など多様な分野の研究に学びながら、公会堂で行われた学習/文化活動の内実を、設置者、催事の主催者、来場者の相互関係においてとらえる視点や広い意味でのメディアととらえる視点をあわせて採用することを宣言する。

第2章では、各地の公会堂設置の経緯とそこで実施された事業内容を分析し、そこに政治家や産業資本家による上からの啓蒙と皇室行事との連携、そして近代都市において市民が表明する集会場への要望という複合的な背景があったこと、そしてそれらは社会教育行政よりは都市計画のなかで構想されていたことを明らかにした。第3章では、代表的な公会堂として日比谷公会堂の設立経緯を取り上げ、市長後藤新平のリーダーシップのもとに東京市の都市計画の一環として計画が進められたことを述べている。第4章は、日比谷公会堂に保管されていたプログラム等の一次資料に基づき、その運営体制とそこで実施された時局講演からクラシック音楽演奏、各種記念式典等々の多様な催事を、昭和初期から敗戦後の占領軍による接収解除になった昭和24年までの4期に分けて詳細に検討した。

第5章は、これを受けて社会教育的あるいは民衆教育的な機能を行なう場とされた同施設であるが、第一に政治的討議を行なう集会場としての機能、第二に文化的な催事を行なう劇場としての機能、第三に国民的な儀礼を行なう儀礼空間としての機能、そして第四にマスメディアの報道によって増幅されることで発揮されるメディアとしての機能の4つが相互に輻輳し合うことで作用した結果であると分析している。第6章ではこうした公会堂のもつ複合性がいかなる意味で「公」たりえたのかについて述べ、それが戦後の教育文化の制度設計のなかで限定的にしか継承されなかったことを述べてまとめとした。

本研究は、日比谷公会堂が保管していた豊富な一次資料を駆使して催事の具体的な内容の分析を行なうことにより公会堂の機能を明らかにした初めての歴史研究である。分析の枠組みとして社会教育や民衆教育、文化活動を施設設置者、催事主催者、来場者の相互関係にとどまらず、都市空間やメディア空間のもつ作用との関係にまで踏み込んで研究を行なったことで、これまでの社会教育施設論に広がりや深みをもたらしたと認められる。以上の点で、博士(教育学)を授与するにふさわしいと判断した。